

食と健康の未来

The future of food and health

梅崎昌裕（東京大学）

Masahiro Umezaki (The University of Tokyo)

人間は、自分の人生がこれからどうなっていくのかを予想し、理想を実現するための行動を選択し、予想される問題を回避する行動を選択する動物である。勉強、保険、貯金、健康追求行動などがその例である。人口社会学の「富の流れ理論 (wealth flow theory)」によれば、人口転換前の高出生率は、子ども世代から親世代への富の還流が前提とされていた。

現代社会における人間は、ぼんやりと予見される新しい未来の社会に大きな不安を抱えながら生きている。継続する未婚化・少子化は、国家の存続、家族のあり方に不可逆的な影響を与える可能性があり、環境問題は地球上における人間の生存を不可能にするかもしれない。新しい人為的化学品への曝露は増え続け、デジタル社会におけるコミュニケーションが人と人のつながりをどう変えるのか見当もつかない。医療行為のなかでは、機械や動物の組織が人体に組み込まれ、人間という存在の輪郭はぼやけるばかりである。

原則論でいえば、社会の未来は、社会を構成する個人の予見と行動の総体として決まっていくのだろう。そこには複雑な相互作用と偶然が作用するはずで、そのメカニズム解明は不可能にも思われる。ただ、未来について現代社会に生きる個人が何を予見し、どのように行動しようと考えているかについて、そのナラティブの収集は可能である。それぞれの個人は自分の関わりのある事柄については、意外にも明確な未来のイメージをもっているものである。ナラティブが収集されれば、少なくとも、未来について私たちがどのように予見しているかは明らかになるかもしれない。

人間は農耕・家畜飼養をおこなう唯一の生物である。とはいえ、人類の長い歴史のほとんどの時間は、ほかの生物とおなじく狩猟・採集により食べものを手に入れていた。200年ほど前に始まった産業革命は農耕・家畜飼養を工業化し、その結果、現代社会の食生活は人類の食生活としてはきわめて異質な特徴をもつようになった。すなわち、自分の存在する生態系で実現可能な食生活という制限が外れ、あらゆる可能性のなかから食べるものを選択することが常識となった。選択のポイントとなるものは変容を続けており、食文化、嗜好に加えて、健康リスクとのかかわり、地球環境への影響などが重視されるようになった。過去50年間を振り返れば、地域の食文化が衰退する一方で、グローバルな食文化が形成された。孤食／共食、飲み会の役割など、食を通じたコミュニケーションにも変化がみられる。これからも同様な変化が続くのか、新しい局面における変化が生じるのだろうか。人口学的な変化は食生活の変化にどのように影響するだろうか。